

クォーター かわさき 通信

2022年 8 月号 No.22 8 月 1 日発行

発行 ●一般社団法人／川崎地方自治研究センター

発行人 ●久保田 昌希

連絡先 ●川崎市川崎区東田町 5 - 1 市労連会館 3F

Tel / Fax 044-244-7610

Email: KYP04423@nifty.com

- ・佐野めぐみさん（前理事長）に聞く
かわさき生活クラブ生協の地域活動
- ・追悼 飯塚正良市議／金芝河韓国詩人
- ・自治研センター活動日誌
- ・川崎市の主な動き

佐野めぐみさん（前理事長）に聞く

かわさき生活クラブ生協の地域活動

川崎版FEC（食／電気・環境／ケア）＋W（働く）を中心に



生活クラブ生協は、1960年代に大量生産・大量消費社会がかかえる諸問題を暮らしの現場から問う社会運動としてスタートしましたが、その中心を担ったのは女性たちでした。生活クラブ生協に参加した女性たちは、性別役割分業の社会に対し、鋭く意義申し立てをおこない、暮らしの中から新しい社会、政治の可能性を問い続けてきました。こうした生活クラブの存在意義は、今日なお色あせていません。今回ご登場を願った佐野めぐみさんは、今年6月までかわさき生活クラブ生協の理事長を務められた人です。同クラブ生協が川崎をフィールドに、どのような考え方にもとづき地域活動を展開してきたのか、うかがうことにしました。

（編集部）

——佐野さんは今年の6月から、かわさき生活クラブ生協の理事長から生活クラブ生協神奈川の副理事長に役割が移られました。通常の組織イメージでいえば、同じ組織内で、しかも神奈川全域をカバーする上位の組織への異動ですから、いわば栄転ということになります（笑）。しかし、実際はそうした意味合いをもった異動ではないようですね。そこでまず生活クラブ生協の組織のあり方からお聞きます。

自治・分権・参加型の組織

佐野 生活クラブ神奈川は神奈川全域をエリアとした生協法人ですが、同時にかわさき生活クラブ生協も法人格をもった組織なんです。実は生活クラブ神奈川では、かわさきを含めて5つの地域ブロックに分け、それぞれ法人格をもった組織（横浜北、横浜みなみ、湘南、さがみ）があって、独立の意思決定

機関をもっているんです。ですから生活クラブの組合員は、組織上は生活クラブ神奈川と地域単位的生活クラブ生協に加入していることになるんです。

生活クラブ生協は、班単位の予約共同購入というユニークな方式を掲げて、1968年に東京でスタートしています。その2年半後の1971年に、この方式をならい横浜で「みどり生協」が設立されます。その後、組合員が増えたことで、1977年に「生活クラブ生協神奈川」へと発展します。その翌年の1978年には、首都圏域の生活クラブグループの連携を強めるために「生活クラブ連合本部」が設立されてほぼ現在のような組織体制ができあがります。

——生活クラブ生協は時代とともに大きく成長していくわけですが、組織上の意思決定は逆に小さくなっている印象をうけますね。

佐野 なぜ、別法人をつくったのか。その理由は、

生活クラブの理念と関わっています。生活クラブの組合員は全員が「出資・利用・運営」に参加しながら、自分たちの暮らしに必要なモノやサービスを「消費材」と呼んで、それを共同購入することを理念に掲げてきています。組合員は単に商品を買うお客さんではなく、あくまで組合員一人ひとりが主役なんです。ですから、そうした組合員の思いを尊重するにはどういう組織のあり方がふさわしいか、つねに考えながら活動してきた歴史があるんです。

とはいっても、組合員が増えてきて組織が大きくなってきますと、どうしても運営がトップダウン型になります。それではまずいということで、意思決定の単位をできるだけ小さくしようということで、2003年に法人格をもった5つの地域生協に分けたんです。ですから生活クラブ神奈川と5つの地域生協に上下関係はないんです。

——では、両者の違いはどこにあるんでしょうか。

佐野 生活クラブ神奈川は全体を統括しているというより、役割がちがうと認識しています。5つの地域生協は共同購入事業が主になりますが、その元請け事業ですとか組合員の共済事業、また、この後紹介します生活リハビリクラブを含む福祉事業などは生活クラブ神奈川が担っています。

——かわさき生活クラブ内でもそうした考えは生かされているんですか。

佐野 法人格が生活クラブ神奈川だけの時代は、川崎には3つの共同購入組織（川崎北、それ以外の川崎地域、複数店舗のコミュニティクラブ）があったんですが、現在はそれを1つの法人をもった生協に変えて、7つの行政区単位に共同購入の組織をつくらせたんです。その単位をコモنزと呼んでいます。コモنزはだいたい1000人単位の組織を想定していて、現在8つあります。麻生区は組合員が多くなりましたので、あさお東、あさお西に2015年に分割をしていますから、8つのコモنزですね。

——それが、かわさき生活クラブ生協の基礎単位ということになりますか。

佐野 組織上の基礎単位でいえば、この8つのコモنزにくわえて、3つのデポーがあります。

——デポーというのは店舗事業のことですね。

佐野 そうです。店舗型の共同購入で、のぼりと、宮前平、たかつがあります。組合員はこの8つのコモنزと3つのデポーを活動拠点にして、それぞれ

に組合員の自治による運営委員会ができています。——それを佐野さんたち理事会が束ねている。

佐野 川崎全体の事業とか運動の推進に責任をもっているのは理事会ですが、組織的にどちらが上というのではないですね。理事会が束ねているというニュアンスではなくて、コモنزとデポーの活動を後ろで支えているイメージですね。ただ、そうは言っても、各コモنزやデポーで問題が起きたりしたとき、どうしようかといった相談がでてきます。だからといって、理事会が上から指導するというのではなくて、理事会も現場の運営委員会のメンバーと一緒に考え、動くことでお互い成長し、育っていく。生活クラブではこうした共に育ち成長していくくみを共有（ともいく）と呼んでいます。

——組織全体が分権的かつ自治・参加型にできていて、それを柔軟に使いこなしている感じですね。

佐野 生活クラブ神奈川との関係も同じなんです。ですから、かわさきの理事長と常務理事は神奈川の理事も兼任をされていて、その中で神奈川全体の共通政策について話し合い、新たな事業を起こすときなどにも神奈川の理事会で討議して決めています。でも原則はやっぱり地域単位ですので、そこはおっしゃるように自治・分権・参加の理念を尊重しながら柔軟にやっていますね。

川崎版FEC自給圏づくり+もう一つの働き方

——さて、ここからは、かわさき生活クラブ生協の地域活動についてお聞きします。かわさき生活クラブの中期計画書には、冒頭に「川崎版のFEC自給圏づくりをめざす」と書いてあります。FはFoodで、EはEnergyないしはEcology、CはCareつまり助け合いの福祉で、このFECをできるだけ地域で自給・循環させようという考え方でしょいか。

佐野 そうです。FECの地域循環にプラスして、そこに新しい働き方と雇用つまりWorkですが、それをくわえたFEC+Wで持続可能な生き方、社会をつくっていかうという構想です。

——ワークというのは、ワーカーズ・コレクティブのことですね。

佐野 そうです。ワーカーズ・コレクティブ（以下、ワーコレと記す）は、家事・介護など家庭で女性が担ってきた無償労働（アンペイドワーク）を共同化しながら、自己資金を出し合い、雇用労働ともちが

う、無償のボランティアともちがう「もう一つの働き方」を創り出す運動のことです。このFEC+Wは生活クラブ神奈川全体の運動方針でもあるんですが、それを川崎という地域社会の中で取り組んでいこうということですね。Fの食べものは、消費材の共同購入の中心が食ですから、それを除けば、もっとも古い取り組みは「ケア」で、そこにワーコレも絡んできますので、そこからはじめましょうか。

参加型福祉+文化の活動拠点「るーむら麻生」

佐野 川崎には、1987年に日本の生協がはじめて立ち上げたというデイサービス施設「生活リハビリクラブ麻生」(以下、リハビリ麻生)があるんですが、設立から34年目の今年4月に場所を同じ東百合丘で移転したんです。移転希望の話はリハビリ麻生が30周年を迎える前からあったのですが、その頃私はリハビリ麻生の運営会議に関わっていました。しかし最初、自分には介護やデイサービスの現場に関わりがなかったこともあって、実はピンと来ていなかったんです。でも、だんだんリハビリ麻生をつくった人たちの思いがわかるようになって、すごいなと思うようになりました。

——リハビリ麻生のきっかけは何でしょうか。

佐野 当時、介護は措置型の時代で、老人病院で働いていた看護師の組合員がいて、手を貸してあげれば歩いてトイレに行けるのに、ベッドに縛りつけられ、オムツをはかされたりしている。そういう屈辱的な状態におかれて、だんだん生きる気力もなくなって、みなさん、亡くなっていく。そんな場所で自分の親とか自分自身が人生の最期を迎えるのはもう耐え難いということで、自分らしい老後をすごせる場所を奮発して創ろうという運動が起きてできた施設で、その運営を担ってきたのがワーコレのみなさんなんです。そんなお話を30周年の少し前ころから聞いてきました。

当時の生活クラブの組合員は、暮らしに必要なものを自分たちの力で創っていこうという熱気みたいなものがあつたんですが、私たちが生活クラブに加入したころは、既に揃っていたこともあり、そうした動きが減ってきていて、必要だと思っても行動を起こして形にするというのは、ものすごく遠いことのような気がしていたんです。でも、こうした運動はやっぱり継続していかなきゃいけないんじゃない



地域複合拠点「るーむら麻生」の船出

かということで、参加型福祉をもう1回、改めて考え直そうという話になってきたんです。

——「参加型福祉」というのは、生活クラブ生協が取り組んできた地域福祉のことですね。

佐野 そうです。住み慣れたコミュニティで助け合い、支え合いながら地域福祉を自分たちの手で創っていこうという運動ですね。介護保険制度がスタートするのが2000年ですが、生活クラブ神奈川はそれより十数年早くから、地域福祉の拠点づくりに取り組んでいたんです。リハビリ麻生は、そうした流れの中でできた施設です。

——生活リハビリクラブは幸区にもありますね。

佐野 ええ。生活リハビリクラブ幸ですね。リハビリクラブ幸もワーコレのグループが運営主体になっています。神奈川にはこの川崎の2つの他に葉山、茅ヶ崎、鴨居、橋本の計6ヵ所あります。事業内容は、通所介護(デイサービス)、訪問介護(ホームヘルプ)、居宅介護支援(ケアプラン作成)、障害者総合支援事業などは共通していますね。

——移転の理由は老朽化ですか。

佐野 もともと配送センターの跡地を使っていましたから、建物は本当に古くてボロな感じなんです。1階を使ってデイサービスをやったり、組合員の活動スペースだったキッチン改装して、配食サービスをする「あいあい」というワーコレもあり、また、川崎市の地域包括支援センターを受託したりしてきました。実はここは2階に上がるには外階段しかなくて、ベビーカーの人、妊婦さん、高齢者には優しくない、通常考えてたら無理といった状態の建物なんです。でもそこで転倒予防体操とか、冷たい床にマットを敷いて子育て支援活動をして、私たちがなりに工夫しながらやってきたなかで、これから先もみんなが安心して集まれるような場所にしたいねと話合って、3年ぐらいかかり参加型福祉の地域拠点

にふさわしいコンセプトをつくってきました。

——パンフレットを拝見しますと、新たな複合拠点「るーむら麻生」とあり、お年寄りがいつもい「る村」、子どもたちがいつもい「る村」、自然と共存してい「る村」にしていきたいと書いてあります。

佐野 地域のなかで孤独に暮らすというのが一番怖いですから、地域に住むいろんな人たちが気軽に「助けて」と言えるような地域にしたいね、みたいな意見が組合員から出てきて、そんな思いと、これまでリハビリ麻生がやってきた活動を組み合わせて構想を練ってきて、今年の4月にオープンを迎えたんです。感無量でした。でもこうした議論のプロセスそのものが、参加型福祉の体現だったかなって考えていまして、それが「るーむら麻生」という名称にもつながっていると思っています。

——みんながいる村、「る一村」ですね。

佐野 そうです。村にちょっとしたいい場所ができて、そこに集って、お年寄りや子どももいて、みんなが笑顔で集まれる活動拠点ということで「るーむら麻生」なんです。移転してからすでに組合員の活動の他に、地域の人が誰でも参加ができるグループが6つくらいできています。今後は、子どもたちの学習支援も始める予定にしています。

——文字通り、地域福祉にプラスして文化活動も入った複合拠点の誕生ですね。

佐野 そうですね。移転後に小規模多機能居宅型介護をはじめましたので、そういう意味では24時間、福祉サービスをうまく使いながら、地域でその人らしく暮らせる体制が麻生で一つできた。でも福祉の施設や事業だけでは、なかなか足が向かないということもあるので、1階の入口のところに8畳ぐらいのお部屋と3階に組合員も地域の方も利用できる広い交流スペースをつくりましたから、みなさん気軽に立ち寄れるようになったのではないのでしょうか。

それから、麻生区の農家さんのところに縁農に行く活動もつくりました。援農ではなくは「縁農」ですね。出会いの縁と書いて縁農部です。人との縁、土地との縁、農との縁、そんなつながりづくりの活動です。農家で収穫、出荷のお手伝いをして、収穫した作物を「るーむら麻生」で販売をしているんです。そうすると地域の方もお野菜を買いに来たわっていうことになって来やすくなりますから、土曜だけですけど、そんなことにも取り組んでいます。

——なるほど。参加型福祉は、同時に食と農の問題とも重なってくるんですね。参加型福祉とは何か、その具体的イメージが見えてきたように思います。さて次は、環境問題についてお願いします。

地域の持続可能性に関心が高まってきた

佐野 2022年の活動方針にも書いたんですが、いま社会で一番大きな問題がコロナというふうになっていて、実際、私たちの暮らしも相当変わってきましたよね。でもいちばん変わったのは実は人々の価値観ではないかなと思っていて、人と人のつながりや関係性とか、自分たちの暮らす地域に対して興味、関心をもつ人たちがすごく多くなってきているんじゃないかなと思っています。

私たちは人、モノ、情報すべて経済活動が集中している都市に住んでいますが、自分たちが住んでいる地域って、便利なんだけど本当に持続可能なんだろうかと考える機会が増えてきているんじゃないでしょうか。ケアの問題もそうですが、もう一つポイントになるのが環境問題ですよね。毎年必ず訪れる豪雨とか、そうかと思うと今年は梅雨の季節になった途端に猛暑になったりとか、地球温暖化とか気候変動にはみなさん感じやすいので、そうしたことから社会や地域のあり方について考えたり、また変える行動に移してもらいたいと思っています。ペットボトルをやめるとか、エコバックを持つとかのレベルだけではなくて、もっと世の中の仕組みを変える行動につながるようなことにチャレンジする必要があると思っています。今一番力を入れているのが電気、エネルギー問題なんです。それで、かわさき生活クラブの運動方針でも、脱炭素社会の実現にむけて2つの活動、一つは全国レベル、二つは川崎での取り組みを掲げています。

再生エネルギー電気の共同購入

佐野 生活クラブ全体の取り組みでは、生活クラブエネルギー事業連合（「生活クラブでんき」）を設立して、再生可能エネルギーの電気を共同購入することをはじめています。生活クラブ系の再生エネルギー発電所は全国で61あるんですが、その発電会社を1個の連合体にすることで、つぶされないという言い方がいいかどうか分かりませんが、事業の継続性を高めて、持続可能なエネルギーの自給をしようとい

うことで、かわさき生活クラブも参画しています。

——生活クラブはもともと原発のない社会、CO₂を減らす社会を方針に掲げてきていますね。

佐野 電気は私たちの暮らしに欠かせないので、節電も大事ですが、我慢してエアコンを止めろとかの話ではなくて、「コンセントの向こう側のことを考えて使いましょう」ということから始めたんですね。

その電気を原発や火力発電ではなくて再生可能エネルギーを使っていきたいというのが生活クラブの基本方針で、なるべく自分たちが住む地域でつくって地域で使うというのが理想だと考えています。

——コンセントの向こう側には発電と送電がありますね。日本は福島原発の過酷事故以降、発電・送電分離の方式に変わりましたが、その運用には大きな壁があるように感じますが。

佐野 問題は大いにあります。再生エネルギーの発電所をつくり電気を売ろうとしても、送電は大手電力会社に頼らざるをえません。しかし電力会社は送電能力に余裕があるにもかかわらず、ちょっと待ってくださいみたいな姿勢が続いています。実は送電に余裕がないというわけではなく、その空き分は原発用にとってあるんですね。ですから送電にも問題があるんだということを常に問題提起しておくことが重要です。でも、運動する私たちの側にも実は一つの壁があるんです。

——何でしょうか。

佐野 我が家もそうなのですが、夫をどう説得するか、みなさん悩んでいますね。やっぱり企業人の夫をもつと、理解してもらうのはなかなか難しいものがあります。

——耳の痛い話ですね（笑）。ところで川崎の中での環境への取り組みはどうなんでしょうか。

企業・行政を巻き込み環境フェスを開催

佐野 昨年から「脱炭素アクションみぞのくち推進会議（DAM会議）」というのができて、溝口が川崎市の脱炭素戦略のモデル地区に選ばれたんですが、かわさき生活クラブも手を挙げて参画しています。その中で企業とか団体を巻き込んだおもしろい動きもはじまっていて、その流れのなかで今年の6月4



エコシティかわさきフェス、全員集合

日、5日に「エコシティかわさきフェス」を開催することができました。同フェスは4年前からはじめたんですが、翌年からコロナになったので、どうするって言いながら、でも、やめないで続けてきました。今年はこの「DAM会議」を活用してもらい、市役所の環境局や企業にもお声をかけ、いろんな人たちを巻き込んで、6月の世界環境デーに合わせて開催できました。

——川崎自治研究センターも共催団体になってますね。

佐野 そうですね、提案事業として開催させていただいています。主催団体は、かわさき生活クラブ生協を中心とした実行委員会をつくり、そこに川崎自治研究センターの他、「かわさきかえるプロジェクト」（使用済みてんぷら油回収による資源循環プロジェクト）やNPO「川崎市民石けんプラント」（使用済み食用油を原料に石けんとBDF燃料を生産する事業）、それに25歳以下の若者でつくる「かわさき若者会議」にも参加してもらいました。おかげさまで今回参加してくださった企業や団体、それから行政もこうした企画はとても大事だと賛同をいただいている、今後もみなさんとコラボを続けていきたいと考えています。

——日本列島全体を視野に入れて、原発や石炭火力に依存しない仕組みづくりにチャレンジしながら、他方、地域では企業を含めいろんなグループ、団体と協働して環境問題を考えるフォーラムを組織していくということですね。

佐野 おっしゃる通りで、環境とかエネルギー問題というのは、規模が大きくて手が出ないと思いがちですが、でも大きいからこそ、多くの人たちと取り組んでいくことが大事だと思っていますし、その出発点は、たとえ小さい動きであっても、当事者であ



脱プラで地場の無農薬野菜を販売（るーむら麻生）

縁農部の収穫作業（麻生区）

る私たちの暮らしの現場から変えていくことが重要だと考えています。

「農のあるまちづくり」をめざす

——そうした考えは、食の生産者との関係でもいえそうですね。

佐野 かわさき生活クラブの運動方針でも食・農・環境を関連づけながら、地場野菜の共同購入を掲げて、宮前区の向ヶ丘流通組合と長く連携してきました。相続等で畑を手放さないとならない問題もあって、今はデポーにだけに地場野菜を卸してもらっています。そんなこともあって、3年程前から、体験農園というかたちで農家の畑の一部をお借りして、希望する組合員たちと指導を受けながら野菜を育てています。

私たちはどうしても消費者の立場ですから、作物をつくることの大変さというのは頭ではわかっていても、現実にはなかなか実感できないですよね。それに農業は土に触れ、畑に行くこと自体が心休まる居場所になっていて、いろんな可能性があるなと思っています。ですので、食べるということだけでなく、暮らしの中の一部に農地や土の空間があること自体が大事なんだということで、「農のあるまちづくり」を活動方針に掲げているんですが、なかなか現実には難しく苦勞しています。

——本格的に農業に関わろうとすると大変ですよ。

佐野 やっぱり現場に行かないとわからないことがいっぱいあって、できるだけ現場に行ける機会とかチャンスを多くつくりたいと考えています。できれ

ば組合員で手分けして、自分たちの地域でこんな農家さんいるんだとか、こんな取り組みをしているんだというのを探してもらえるよう今年は提案をしています。たとえば川崎区には本当に農家は1軒もないのかとか、幸区も農家はないといったのに、あるじゃないですかとか。インタビューだけでもいいと思うんですが、どんな取り組みをされているのか、JAに卸しているのかとか、何に苦勞されているのかとか、まず自分たちが住む地域の農について知るということを組合員にしてもらいたいと思っています。実際に作っている人たちとのつながりをセットにして考えていくことがとても大事ですし、私も組合員の紹介で、知り合いになった麻生の農家さんの圃場に行って、いろんなことを学んでいます。——学びって、具体的にどんなことでしょうか。

佐野 縁農部の活動として収穫出荷の手伝いをしているのですが、あー、こんなふうになってるんだとか、こんな苦勞があるのかとか、お手伝いすることで、農作物に対してずいぶん見方が違ってきました。何よりも採れたてそのままが1番美味しいことを実感します。出荷で余ったものも含めて買い取って販売していますが、買う側からすれば安くしてよと言いがちですよ。でも農の現場を体験すると、「あんなに苦勞してつくってるのに、そうそう安くできないね」とか思います。やはり消費者と生産者が向き合って対話することの大切さというのを痛感しますね。

それと農のあるまちづくりでいえば、高津区の農家で、自分では農業を続けられないんだけど、農地はできるだけ地域のために残したいというお考えの方がいらして、溝口のまちづくりに絡んでいる不動産会社と相談しながら、少しでも農のあるまちづくりを次世代に受け渡したいと考えて、その可能性を探っています。

内、外の仕切りをこえ地域を変える活動を

——最後になりましたが、新しい働き方（ワーカーズ・コレクティブ）について、もう少しお聞かせください。

佐野 生活クラブ神奈川はワーコレとセットでデポーの運動をやってきてますので、デポー事業の委託、それと高津センターの事務と配送もワーコレです。それと三協運輸(株)という会社にも配送を委託し

ています。三協運輸は生活クラブと共に地域の若者の雇用を生み出している会社です。

——その他、ワーコレ運動にはどのような分野がありますか。

佐野 先の2つの生活リハビリクラブの他に、保育園や、総菜や弁当の販売、家庭に入ってお掃除とか生活支援をするワーコレ、あと鍼灸や漢方薬局もあります。ワーコレは私たちの生活にとっても、生活クラブ生協の活動でも本当になくてはならないパートナーなので、いろんな分野でワーコレが立ち上がっていて素晴らしいと思います。

——年齢的にはどうなんですか。

佐野 さまざまですね。配送や宅配業務に関連するワーコレでは、配送センターにある託児所に子どもを預けることができます。宅配業務で、働くのは無理でも子どもの世話はできるよといって、託児所の運営を組合員が立ち上げました。そうしたことで、若いワーコレも増えましたね。それとベテランも役割を変えて継続している方々も多いです。

——いまの話から、自分たちの生活を共同化するというか、働くためには、その条件を整えなければならぬわけで、その際、困り事を支えるために新たな集団ができて、お互い協力関係をもちながら、自分たちの力で暮らしやすい状況をつくっていく姿がみえてきますね。

佐野 ワーコレと組合員はパートナーシップ協約を結んでいますけど、生活クラブの組合員とワーコレは共同運営でやっているという考え方なので、なくてはならない存在ですね。

——今日は川崎版のFECプラスW（もう一つの働き方）について話をうかがいました。1つは組合員同士の相互扶助について、もう1つは地域の人たちとの地域づくりについても聞くことができました。

佐野 地域といったときに、組合員、組合員外ということはあまり関係ないかなと私は考えていて、組合員も、そうでない人も地域で暮らしていることには変わりなくて、それがごくごく普通の考え方ですよ。ですから私たちの地域活動に共感していただいて組合員になってもらえれば嬉しいですけど、組合員でなくても、一緒にできることはたくさんあるというふうには考えています。

特に今年は「外にどんどん出ていこう！」という方針を立てていますので、組合員と会うのも、また組合員外の人と会うのも、待ち構えていては何も起こらないわけですし、もうどんどん出かけて行って、少しでも行動して地域をより良い方に変える動きをはじめましょうという方針で進めています。

——かわさき生活クラブ生協の活動、また佐野さんご自身の考えがよく分かりました。長時間、ありがとうございました。（聞き手：大矢野修）

自治研センター活動日誌 2022年4月～6月

4月

- 8日(金) 文庫カフェ
- 11日(月) 地域未来創造機構発会式
- 14日(木) ヘイト事務局会議
- 17日(日) るーむら開所式
- 21日(木) 地域未来創造機構理事会
- 22日(金) 現代の地方自治研究会
- 26日(火) 市民シンクタンク研究会

5月

- 8日(日) ヘイト街宣
- 10日(火) ヘイト事務局会議
- 11日(水) 自治研C事務局会議
- 17日(火) NPOしんゆり・芸術のまちづくり理事会・総会
- 21日(土) 平和と生活のつどい
カジノを考える市民フォーラム
- 22日(日) ぐらす・かわさき総会

- 28日(土) 参加型システム研究総会
- 31日(火) 神奈川県自治研センター理事会
市民シンクタンク研究会

6月

- 2日(木) ヘイト事務局会議
- 4日(土) かながわ生き生き市民基金評議員会
- 5日(日) エコシティかわさきフェス2022
- 9日(木) グローブシップ社訪問
- 10日(金) 文庫カフェ
- 11日(土) かながわ自治研
- 12日(日) ヘイト街宣
- 16日(木) 神奈川県自治研センター総会・理事会
民権かながわ講演会
- 18日(土) かえるプロジェクト総会
- 23日(木) ヘイト事務局会議
- 26日(日) 子どもの権利フォーラム総会